琉球大学学術リポジトリ

本学学生の基本的生活行動の実態について：生活時間調査から

メタデータ	言語:
	出版者: 琉球大学教育学部
	公開日: 2007-08-08
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 並河, 裕, Namikawa, Yutaka
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/1351

本学学生の基本的生活行動の実態について
～ 生活時間調査から ～

並 河　　裕*

Research on Ordinary Life Patterns of the Students at University of the Ryukyus.
—Results of time budget survey—

Namikawa Yutaka

ABSTRACT

It is important to grasp the student's actual condition to think about the education that it stood up in the student's point of view, and a service. The purpose of this research is to grasp university student's ordinary life patterns comprehensively. It tried an analysis by using the time budget survey.

A main result is as the following.

Boy's hours of sleep were compared to the girl, and it was the result that it was abundant. The tendency that a girl was abundant was seen by time to spend it on the personal care as well as a nationwide result of investigation.

The tendency that it was rare was seen about the social life behavior as an analyzed result the time of going to school in comparison with the national average. Furthermore, the tendency that it was rarer than the national average was seen by time as well to take a lecture.

It is the present condition that "what day, regularly in the week" is there 80% though it is lower than the national average as far as it was seen about the execution conditions of the part-time job from the behavior person rate. And, walking time was the result that it was rare. Environment-making comfortable walk is necessary in the campus from the viewpoint of the fulfillment of the student life because of the maintenance of the health and the increase.

A difference was seen about the free time behavior in the way of spending culture, amusement time between the weekdays and the holiday. Then, the difference in time was seen between the boy and the girl as well. When it tried to see recreation activities, the execution frequency of the boy was high, and on the other hand, the characteristics that the time required for around one time was abundant were seen with a girl.

Next, each coefficient of correlation was calculated about culture, amusement time and part-time job time and recreation activities. Negative correlation was seen between the culture, amusement time and recreation activities of the weekdays as that result. Furthermore, negative correlation was seen between the time of the part-time job and the time of the culture, amusement. This three behavior can be thought that daily life is being done with having relation to each other.

---

*保健体育教室

Ⅰ　はじめに

わが国の大学・短期大学進学率は上昇を続け、その数値は50％に迫っているという。このような進学率の上昇に伴い学生の興味関心は極めて多様性を帯びるようになってきている。こうした状況は、21世紀を迎えた社会がさらに高度化・複雑化・専門化・国際化を進めていく中で、大学に対する期待も高めながら続いていくものと考えられる。

他方、わが国の18歳人口は平成４年の205万をピークに減少傾向が続き、将来的には120万に推移するといわれている。つまり、これからは学生が大学を選択する時代に、言い換えれば、高等教育のグローバル化がますます強くなる傾向が進むと考えられる。

このようなことから、大学は厳しい競争的環境の中で、いかに大学の個性を主張し、学生の視点に立った教育やサービス機能を高めていくかが求められている。

学生の視点に立った教育やサービスを考えるには、学生の実態を把握することが重要である。文部科学省は、近年の社会環境の変化や大学進学率の上昇に伴って、多様な能力や適性を持つ学生が大学に入学してくることに対処し、さらに豊かな学生生活を実現する為の方策について検討した結果を「大学における学生生活の充実方策について～学生の立場に立った大学づくりを目指して」という答申として報告している（2000）。この報告では、「教員中心の大学」から「学生中心の大学」への視点の転換、さらに学生に対する指導体制を充実させることの重要性を指摘している。ところで、現在の学生は豊かな社会に生きながら、明確な自覚を持たず、さらには心に悩みを持つ学生が多いという。このような学生の実態を把握するため文部科学省は、本学においても３年ごとに実施されているが、定期的に学生の実態調査を実施している。本来これらの調査結果が学生の立場に立った大学づくりに生かされるべきであるが、近年の著しい社会変化の中では、学生のニーズや行動を的確に把握することは困難になってきている。それ故、異なった視点から学生の実態を調査することは学生のニーズに合った方策を進めていく上で重要である。日常生活を把握するための調査方法の１つとして、生活時間調査が挙げられる。生活時間調査を使った研究報告を見てみると、労働と生活との関連を調べたものや（鷲谷、2000）、専門学生の基本的生活行動の実態を調査したもの（名久井、1999）、さらに、余暇の過ごし方などの分析（坂井、1992）等に生活時間調査が用いられている。このように、日常生活行動に関して、時間をどのように使用しているかという観点から分析が試みられており、生活時間調査は、一定の行動を包括的に把握する為の有効な調査方法であるといえる。

そこで本研究では、本学学生の日常生活の行動全般を包括的に把握する為に、生活時間調査をもちいて、基本的な生活行動の実態を明らかにすること、また著者は、過去において本学学生の日常生活行動を把握する為に生活時間調査票を用いて実施したことがあり（未発表）、これらの過去のデータと現在のデータを比較することにより、本学学生の基本的生活行動の特徴を明らかにすることを目的とする。今回は、本学学生の基本的生活行動の実態を報告することとする。

Ⅱ　研究方法

調査方法

調査は平成12年11月初旬から下旬にかけて実施した。データの収集は、健康と運動の科学Ⅰの講義を通じて、自己記入方式で、１週間連続して生活時間を記録してもらった。

調査対象

本学学生を対象とした。内訳は男子21名、女子29名の計50名である。

調査内容

生活時間調査は、ヨーロッパやわが国においても定期的に国民の行動を把握する為に実施されている。ヨーロッパでは10大分類、33中分類、133分類が用いられている（ヨーロッパ統計局）（鈴木泰・横山滋、1987）。一方、わが国の社会生活基本調査などでは、３区分20分類が用いられている。将来は、国際労働機関（ILO）や国際連合の

試案（10大分類、80中分類）などに統一する動きもあるようである。社会生活基本調査に用いられている生活時間調査は、1日の行動を大きく3区分に分けられている。まず、睡眠、食事、など生理的に必要な活動を「1時活動」とし、仕事、家事など社会生活を営む上で義務的性格の強い活動を「2次活動」、これら以外の自由に使える時間における活動を「3次活動」としている。さらに、これらを20種類の行動に分類して調査が行われている。本研究では過去のデータとの比較を考えた為、基本的には上述の枠組みを維持しながら、15の行動に分類した生活時間調査票を用いた。調査は月曜日から日曜日を含む連続した1週間となるように配慮をし、プリコード方式により学生自身に記入を求めた。

Ⅲ　結果及び考察

生活時間調査は、1日の行動時間を記録したデータであるが、これらのデータには単に時間的な記録のみではなく、生活行動の実態をあらわす尺度とも言える。本研究では、本学学生の日常生活を包括的に把握する為に、連続した1週間の生活行動が記録できるように作成された生活時間調査票を用いて、大学生の基本的生活行動の分析を試みた。

表1は、15の行動に分類された各項目について平日、休日、さらに男女別の時間量を示したものである。

表1　基本的生活行動の分類別時間量の男女比較（平日、休日）

単位:分

項　　目	平日総時間	平日一日平均			休日総時間	休日一日平均		
		男子	女子	全体		男子	女子	全体
睡眠及び午睡	2182	446	430	436	951	502	456	476
休息(横臥)	173	35	34	35	82	50	34	41
休息と談話	580	109	121	116	269	149	123	134
食　事	410	72	89	82	166	80	85	83
身 支 度	159	23	38	32	70	28	41	35
通学(toho)	34	6	7	7	—	—	—	—
通学(car)	186	35	38	37	—	—	—	—
授　業	897	187	174	179	—	—	—	—
歩　行	155	30	32	31	66	55	18	33
入　浴	151	26	34	30	64	28	35	32
家　事	159	24	38	32	84	38	45	42
教養・娯楽	925	215	164	185	408	206	203	204
レクリエーション	424	92	79	85	292	137	152	146
アルバイト	569	102	123	114	233	91	135	117
そ の 他	252	50	50	50	144	61	80	72

注）平日は月曜日から金曜日、休日は土曜日と日曜日

注）各分類項目は、当該行動をしなかった人を含め、平均を算出した。

1．生活必需行動について（睡眠、食事、身支度、入浴）

睡眠時間については、平日平均時間が436分、休日平均時間が476分と、平日と休日に40分の差がみられた。男子と女子を比較すると、平日が16分、休日が48分の差がみられた。どちらも男子の睡眠時間が女子よりも多く、休日はその差が顕著であった。図1は月曜日から日曜日までの睡眠時間を、男女別に表したものである。図1から、平日は木曜日がもっとも長い睡眠時間となっており、一旦下降を示した後、日曜日に最も高い値を示し、その後下降するという傾向が見られた。このように1週間の睡眠時間の推移は、男女共に睡眠時間そのものには差は見られるが、同様の傾向であった。

食事の時間については、平日平均時間が82分、休日平均時間が83分と、平日と休日にあまり差はみられなかった。しかし若干、女子の方が平日および休日ともに、男子よりもゆとりのある食事時間を過ごしているようである。

身支度にかける時間は、平日が32分、休日が35分であった。女子は男子に比べて、平日で15分、休日で13分多く、身支度にかける時間が長いという結果であった。また、入浴にかける時間は、平日が30分、休日が32分であった。全国的な生活時間調査である社会生活基本調査（1996）やNHK国民生活時間調査（1996）では、入浴や身支度等を身の回りの用事という行動分類で調査している。これらのデータと比較してみると、どちらの調査も身の回りの用事にかける時間は1時間弱と報告しており、本調査の身支度と入浴時間を加えた時間とほぼ同様の値であった。

このように生活必需行動としての睡眠や食事、身の回りにかける時間は、睡眠時間を除いて女子の方が男子よりも若干多くの時間をかけているという現状がみられた。

2．社会生活行動について（通学、授業、歩行、家事、アルバイト）

本調査では、社会生活を送る上で必要な行動としては、通学、授業、歩行、家事、アルバイトを設定した。これらの行動について検討してみる。

通学時間は、徒歩と自動車及びバイクといった乗り物に分類し記録を行った。徒歩の時間は平均7分、また乗り物による時間が平均37分という結果であった。単純計算すると、通学に要する平均時間は44分となる。NHK国民生活時間調査報告（1990）によると、全国の大学生の通学に要する時間は、平日の平均時間が1時間58分である。琉球大学の場合、県外からの通学はありえず、全国の大学生に比べて本学の学生は通学による心身の疲労は少ないのではないかと考えられる。言い換えれば、本学の学生は比較的ゆとりのある学生生活を送っているのではないかとも言えるかもしれ

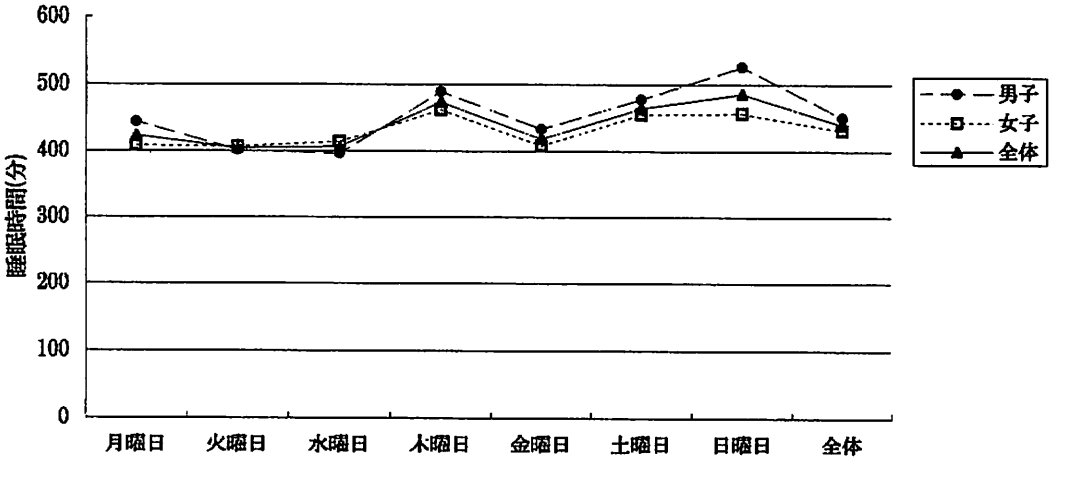

図1　男女別にみた1週間の睡眠時間の推移

ない。次に、学生は1日にどれくらいの講義を受けているのか、このことを授業時間から見てみる。平日一日あたりの平均授業時間は男子が187分、女子が174分であり、全体の平均時間は179分であった。1講義は90分単位なので、1日あたり2講義を受けていることになる。上述のNHK国民生活時間調査によると、大学生の平均的な授業時間は4時間50分であり、本学学生の授業時間は明らかに少ないといえる。

次に、家事にかける時間を見てみると、女子は平日が38分、休日が45分となっており、男子は、それぞれが24分と38分であった。女子の方が、平日で14分、休日で7分男子よりも炊事や洗濯といった行動に多くの時間を使っているという現状がみられた。

次に学生のアルバイト状況について見てみると、休日の平均時間が114分、休日が117分であった。男女別にみてみると、女子は男子に比べて多くの時間をアルバイトに費やしており、男子との差は平日が21分、休日が36分であった。さらに、表2は男女別にアルバイトの頻度や実際にアルバイトを行っている行動者の比率等を示したものである。実際にアルバイトを行っているものの比率（以下、行動者率とする）は男子に比べ女子が高く、逆に一回あたりの平均時間は男子が多いという傾向が見られた。また、1週間のうちで行動者率の高い曜日は、火曜日と金曜日であり、男女共に同様の傾向が見られた。文部科学省の調査によると、大学生・短大生のアルバイト従事者に占める男女比率は、明らかに女子の方が多いと報告されており、本調査においても同様の結果であった。また、本学学生のアルバイトの状況に関しては、3年おきに調査報告される学生生活実態調査にみることが出来る。表3は昭和60年から平成12年までの調査報告から、アルバイトの有無、アルバイトの程度を抜粋して表したものである。このデータによると、昭和60年から平成3年まで、アルバイトを行っている学生は、66～68％の範囲で推移し、平成6年度から平成12までは54～56％の範囲で推移している。アルバイト従事者の全国的平均は80％と高い数値が報告されており、全国平均から本学学生のアルバイト状況を判断すると、アルバイトをしている学生は少ないといえる。ただ、これは8割に対して6割が少ないという相対的な判断をしているに過ぎない。さらに、アルバイトの程度についてみてみると、「週に何日か定期的に」アルバイトを行っている学生の比率が73.1％から平成12年の80％に増加している。本学の学生のアルバイト状況は、生活の中でより多くの時間をアルバイトに費やす学生が、増加しているという現状がみ

表2　男女別にみたアルバイトの頻度及び1回当りの時間量

		月曜日	火曜日	水曜日	木曜日	金曜日	土曜日	日曜日	平均頻度
男子	頻度(回数)	6	8	5	6	8	6	5	2.10
	行動者率（％）	28.57	38.10	23.81	28.57	38.10	28.57	23.81	
	行動者平均(分)	380.33	340.13	388.00	302.33	240.13	336.67	362.00	
女子	頻度	12	14	10	11	13	13	12	2.93
	行動者率	41.38	48.28	34.48	37.93	44.83	44.83	41.38	
	行動者平均	277.50	263.21	363.30	278.91	311.54	323.08	302.08	
全体	頻度	18	22	15	17	21	19	17	2.58
	行動者率	36	44	30	34	42	38	34	
	行動者平均	311.78	291.18	371.53	287.18	284.33	327.37	319.71	

注）行動者率は、行動者数／属性別数＊100とした。

表３　本学学生のアルバイト状況の年次的推移

	年　度	昭和60年度	昭和63年度	平成3年度	平成6年度	平成9年度	平成12年度
アルバイトの有無	している	67.8	66.2	68.4	56.7	55.1	54.9
	してない	32.2	33.8	31.6	43.3	44.4	44.4
アルバイトの程度	毎日	8.5	7.8	7	5.3	8.1	6
	週に何日か定期的に	73.1	73.8	73.5	81.2	77.6	80.1
	たまに必要に応じて	6.9	9.6	9.5	6	6.4	5.8
	休日	2.1	2.3	2.3	4.3	3.6	4.3
	良い条件	4.3	4	4.2	2.4	2.4	1.8
	休暇中	5.1	2.6	3.5	0.8	0.8	0.9

注）琉球大学学生部発行の「学生生活実態調査報告書」のデータをもとに作成

てとれる。

次に、歩行という行動を１日に歩く時間から見てみると、平日の平均が31分、休日が33分であり、男女を比較すると、休日の男子が女子よりも37分多く歩いているという結果であった。歩くことが健康に良いということは、現在社会においては当たり前のこととして受け止められているが、本学学生の歩行に費やす時間を見ると、必ずしも十分とはいえない。沖縄は地理的に厳しい気候条件である。１年の大半が熱帯夜という気候の中で、歩くと行く行動が減少することはある意味では当然のことかもしれない。さらに、車社会という要因がそれに拍車をかけている。元来、歩くという行為は生理的に自然なものである。しかし現在社会においては、レクリェーションや健康といった目的を伴った行動への変化がみられる。これらのことを考えると、今後、学生生活を充実させるためには、健康の維持増進という観点から、快適に歩くことが出来るキャンパスづくり、例えば、ベンチとか木陰等を適時配置するということを進めていくことが必要と考えられる。

３．自由時間行動について（休息と談話、教養・娯楽、レクリェーション、その他）

休息と談話に費やす時間は、平日の平均時間が116分、休日は少し多くなって134分であった。男女を比べると、平日は女子の方が12分多く、逆に休日では男子の方が26分多いという結果であった。さらに、横臥を伴う休息の時間は、平日平均時間が35分、休日平均時間が41分であった。男子の休日平均時間が女子よりも16分多いという特徴が見られた。これは、家事や身支度等の行動に費やす時間との関連からみても、休日の過ごし方に男女差があることが伺える（牧田、1997）。

次に、教養・娯楽に費やす時間についてみてみると、平日の平均が185分、休日が204分と、教養・娯楽に費やす時間が休日に19分平日よりも増加している。男女別にみてみると、男子と女子では異なった傾向を示した。男子は平日も休日も同じような行動を示しているが、女子には休日の教養・娯楽時間が平日よりも39分の増加が見られた。もう少し詳細に検討するために、月曜日から日曜日まで、男女別に教養・娯楽に費やす時間量を図２に示した。男女差のもっとも多くみられたのは火曜日の73分であり、土曜日にその差は20分に短縮している。また、教養・娯楽時間の変化は、木曜日まで上昇し、一旦下降してから週末に上昇するという傾向が見られた。本調査で、教養・娯楽として設定した内容は、読書、学習、テレビやラジオ等である。本来は、それぞれ別個に分析すべきであるが、今回は１つの行動分類として分析の対象とした。詳細については別の機会に報告する。

次に、レクリェーション活動の状況を、活動に当てている時間から見てみる。平日のレクリェー

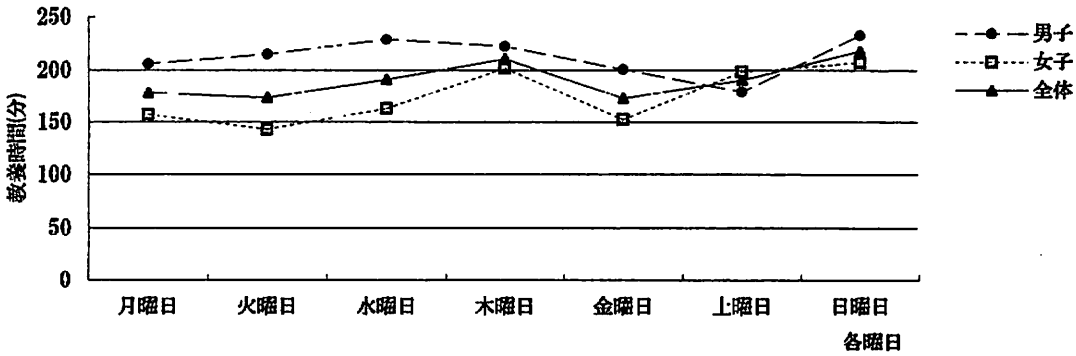

図２　男女別にみた１週間の教養時間量の推移

表４　男女別レクリエーションの実施頻度及び１回当りの所要時間

		月曜日	火曜日	水曜日	木曜日	金曜日	土曜日	日曜日
男子	回数	10	12	15	15	12	15	15
	行動者率(%)	47.61	57.14	71.42	71.42	57.14	71.42	71.42
	行動者平均(分)	131	120	149	180	167	203	181
女子	回数	16	12	16	14	10	18	19
	行動者率	55.17	41.37	55.17	48.27	34.48	62.06	65.51
	行動者平均	181	125	175	188	167	219	257
全体	回数	26	24	31	29	22	33	34
	行動者率	52	48	62	58	44	66	68
	行動者平均	162	123	162	184	167	211	224

注）週当り平均実施回数は、全体で3．98であり、男女別には、男子4．48、女子3．62である．

注）行動者率は、行動者数／属性別数＊100として算出した。

ション活動時間は、平均で85分、休日はかなり増えて146分であった。男子と女子を比べると、男子は平日の活動時間が多く、一方、女子は休日の活動時間が多いといったレクリエーション活動時間に男女の違いが見られた。この男女の差を詳細に検討するために、表４にレクリエーション実施頻度や時間を、男女別及び曜日ごとに示した。週当たりの平均実施回数は、全体で3.98である。男女別には、男子が4.47と女子の3.62に比べ高い値を示した。実施率から男女の特徴を見てみると、男子は水曜日と木曜日及び土曜日と日曜日が70%という高い実施率を示した。一方、女子は土曜日と日曜日が比較的高い値を示し、それぞれ62%と66%であった。全体的にレクリエーション活動の頻度は男子が高いようであるが、１回あたりの所要時間は女子の方が多いという傾向が見られた。

その他の時間については、平日平均は50分で、休日平均が72分であった。男女に違いが見られたのは休日であり、女子が19分高い値を示した。

最後に、大学生の日常生活行動を構成する要因が、それぞれどのように関わりをもっているのかを調べるために、平日や休日における教養・娯楽時間とアルバイト及びレクリエーション時間といった行動の相関係数を求め、表５に示した。同一行

表5　各項目間の相関係数（教養，アルバイト，レクリエーション，その他の時間）

項　　目	教養・娯楽A	教養・娯楽B	レクリエーションA	レクリエーションB	アルバイトA	アルバイトB
教養・娯楽A	1.0000					
教養・娯楽B	0.5559 **	1.0000				
レクリエーションA	-0.3324 *	-0.1778	1.0000			
レクリエーションB	-0.2003	-0.2638	0.6266 **	1.0000		
アルバイトA	-0.2575	-0.3228 *	-0.0335	-0.0574	1.0000	
アルバイトB	-0.1458	-0.3342 *	0.0021	-0.1815	0.7328 **	1.0000

注）** P<0.01，* P<0.05

注）Aは平日、Bは休日をあらわす

動においては平日と休日に相関が見られるのはごく当然の結果である。各行動間の相関係数を検討した結果、平日の教養・娯楽と平日のレクリエーションとの間に有意な負の相関が見られた（r＝−0.3324、p<0.05）。また、平日及び休日のアルバイトと教養・娯楽との間に有意な負の相関が見られた（r＝−0.3228、p<0.05、r＝−0.3342、p<0.05）。教養や娯楽の時間はレクリエーション活動と密接な関係にあり、一方の行動時間を多く取ると片方の時間が少なくなるという関係がみられた。同様にアルバイトの時間が多いものは教養や娯楽に費やす時間が少なくなるという関係がみられた。本調査の教養や娯楽の時間の中身は、予習・復習や読書といった学習的なものとテレビや雑誌といった娯楽的な時間を含んでいるため、一概に論ずることは難しいが、アルバイトのために予習や復習といった学業が疎かになるといった現状は考慮しなければならないであろう。文部科学省の調査によるアルバイト従業者の比率が80%を維持している現状、また本学の学生のアルバイト実施状況が、「週に何日か定期的に」が80%であることを考えると、学生にとって充実した学生生活を送るためには、学業とアルバイトを両立させる何らかの方策を講じることが必要と考える。

Ⅳ　まとめ

本調査は、学生の視点に立った教育やサービスを考えるには、学生の実態を把握することが重要であるという視点から、本学学生の基本的な生活行動を包括的に把握する為に、生活行動の把握に広く用いられている生活時間調査を使用して分析を試みた。主な結果は以下の通りである。

生活必需行動としての睡眠時間に関しては、男子が女子に比べて多いという結果であった。身の回りの用事に費やす時間は、全国的な調査結果と同様に女子に多いという傾向がみられた。

社会生活行動については、通学に要する時間が全国平均に比べ少ない傾向が、さらに講義を受けている時間も全国平均よりも少ないという傾向がみられた。アルバイトの実施状況に関しては、行動者率からみた限りでは全国平均よりも低いが、「週に何日か定期的に」が80%いるという現状であった。また、歩行に費やす時間は少ないという結果であった。学生生活の充実という観点からは、健康の維持・増進の為に、キャンパス内での快適な歩く為の環境づくりが必要と考えられる。

自由時間行動に関しては、教養・娯楽時間の過ごし方に、平日と休日の違い、さらに男女の差が見られた。レクリエーション活動については、男子は頻度が高く、一方女子は1回当りの所要時間が多いという特徴が見られた。また、教養・娯楽時間とアルバイト時間、そしてレクリエーション活動との関係を相関係数により検討した結果、平日において教養・娯楽時間とレクリエーション活動時間との間に負の相関が見られた。さらに、ア

ルバイトの時間と教養・娯楽の時間との間にも負の相関が見られた。これらの３つの行動は、お互いに関連をもちながら、日常生活が行われているものと考えられる。

参考文献（Reference）

赤松　潤（1992）50年間の生活時間の変化～時間価値の研究（3）～　函大商学論究　第25巻　第２号：155-175.

学生生活実態調査委員会（1985）昭和60年度学生生活実態調査報告書．琉球大学学生部.

学生生活実態調査委員会（1988）昭和63年度学生生活実態調査報告書．琉球大学学生部.

学生生活実態調査委員会（1991）平成３年度学生生活実態調査報告書．琉球大学学生部.

学生生活実態調査委員会（1994）平成６年度学生生活実態調査報告書．琉球大学学生部.

学生生活実態調査委員会（1997）平成９年度学生生活実態調査報告書.琉球大学学生部.

学生生活実態調査委員会（2000）平成12年度学生生活実態調査報告書．琉球大学学生部.

牧田徹雄（1997）生活時間の曜日別比較分析　日本放送出版協会　放送研究と調査　2：50-55.

牧田徹雄（2001）テレビ視聴に１時間を超える県間差～2000年NHK県別生活時間調査から～　日本放送出版協会　放送研究と調査　5：2-11.

文部科学省研究調査委員会（2000）大学における学生生活の充実方策について（報告）～学生の立場に立った大学づくりを目指して～

名久井孝義（1999）高専生、低学年の基本的生活行動の実態について　～S高専における１年生と２年生の生活時間と食事行動を中心に～　仙台電波工業高等専門学校研究紀要　29：1-13.

日本放送協会放送世論調査所（1990）NHK国民生活時間調査（全国編）　日本放送出版協会.

坂井重遠（1992）余暇の過ごし方～個性的な時間を楽しもう（教育はリズムだ＜特集＞～教師生活にもリズムを）～　金子書房　児童心理　46（12）：1524-1529.

総務庁統計局（1996）全国－生活時間篇（その１）～男女、年齢、就業状態別にみた１日の生活時間～　社会生活基本調査報告　第１巻

総務庁統計局監修（2000）生活時間とライフスタイル　財団法人日本統計協会.

鈴木　泰・横山　滋（1987）生活時間の国際比較　日本放送出版協会　放送研究と調査　6：2-13.

吉田理恵（1997）生活時間調査にみる「ながら」行動の分析～テレビの「ながら」視聴の現況と変化～　日本放送出版協会　放送研究と調査　4：54-59.

鷲谷　徹（2000）学校教員の労働と生活（第１報）～生活時間調査から～　労働科学　76（6）：233-260.

鷲谷　徹（2000）学校教員の労働と生活（第２報）～生活時間調査から～　労働科学　76（7）：289-310.

鷲谷　徹（2000）学校教員の労働と生活（第３報）～生活時間調査から～　労働科学　76（8）：339-354.